

令和 2 年度つなひろキャンペーン コロナ禍における地域に向けた 取り組みアンケート 結果報告



社会福祉法人 東京都社会福祉協議会

東京都高齢者福祉施設協議会

1. はじめに

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症に振り回されたまま過ぎており、終息の見通しもまだ立てられていない状況にあります。高齢者福祉・介護の現場では、感染症対策に忙殺され、外部の人や物との接触にも厳しい制限をかけざるを得ない状況が続いています。

このことは、私たちが日ごろ取り組んできていた、地域に寄り添い、手助けの必要な方々に手を差し伸べていく活動にも大きな影響を及ぼしています。

例年、高齢協の会員施設・事業所が、地域の多様な資源とともに取り組んできた「つながれ ひろがれ ちいきの輪」キャンペーンも、新型コロナウイルス感染症の感染拡大、会員施設・事業所の状況を踏まえて、見送ることとなりました。

しかしながら、我々の施設・事業所の周辺には、様々な課題を抱えた方々が暮らし続けています。また、新型コロナウイルス感染症がきっかけとなって、新たなニーズも出てきているはずです。

「つながれ ひろがれ 地域の輪 ワーキングチーム（以下、WT）」では、このような状況だからこそ、私たちが創意工夫を凝らし、地域で暮らしがいっぱいの方々のニーズに応える取り組みが必要だ、と考えました。

そこで、高齢協の会員施設・事業所に対して、コロナ禍における地域に向けた取り組みの実施状況のアンケート調査を行いました。

回答数は 137 施設・事業所と決して多くはありませんでしたが、これまでの取り組みをコロナ禍の現状に合わせた形で継続している事例や、コロナ禍だからこそ必要と考えられた新たな取り組み例などの実施状況が見えてきました。

また、コロナ禍の影響は、それぞれの施設・事業所の活動に暗い影を落としていることが明らかになった一方で、コロナ禍における地域に向けた取り組みのヒントとして、多くのアイデアなどが寄せられるなど、決して中止・縮小ばかりでない前向きな姿勢が見られました。

地域には、コロナ禍だからこそ、私たちとの「つながり」を必要としている方々が多くいらっしゃいます。東京都高齢者福祉施設協議会会員施設・事業所の皆様には、このアンケートの内容をご覧ください、自分の施設・事業所が地域に向けた活動を行う参考にしていただければと思います。

それぞれの地域で、できる取り組みを続けていきましょう。

2. アンケートの目的・概要

(1) アンケートの目的

- ・地域に向けた取り組みを実施するにあたっての工夫やアイデアを共有し、各施設・事業所での取り組みの参考とする。
- ・地域に向けた取り組みの実施状況等から改題を把握し、今後の活動に活かす。

(2) アンケート概要

対 象 東京都高齢者福祉施設協議会会員施設事業所

配布数 1205 ヶ所

回答数 137

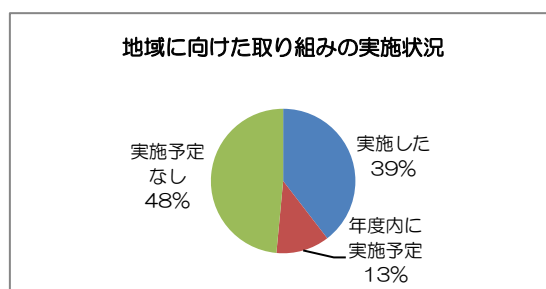
<回答施設種別>

特別養護老人ホーム	84	61.3%
軽費老人ホーム	5	3.6%
養護老人ホーム	3	2.2%
デイサービス	23	16.8%
地域包括・在宅介護支援センター	22	16.1%

3. 地域に向けた取り組みの実施状況

(1) 令和2年度の取り組み実施について

取り組みを行った	54	39.4%
取り組みを行っていない	67	48.9%
今後予定している	16	11.7%



(2) 行った取り組み、または今後予定している取り組みについて

昨年度以前から継続している取り組み	47	68.1%
今年度からの取り組み	22	31.9%

(3) 取り組みの内容・取り組みにあたっての工夫（実施済みの取り組み）

<昨年度から継続しての取り組み>

①介護予防・高齢者支援

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
市が勧める、住民主体の介護予防活動に対し、施設のラウンジを開放し地域住民の集う場とした	中心メンバーとは施設の概要や当法人の理念等について事前に共有の機会を持ち、活動時のルール作りを共に行った。
今まで行っていたサロンは中止としたが、各町内会での体操教室はトレーナーを派遣し再開することができた	毎月町内会の会長と連絡をとり、先方の希望もあり、感染症対策を取りながら8月より体操教室を再開した。
10月からは、地域のボランティア団体や地域ケアネット（市独自の仕組み）で、ラジオ体操を実施	
フレイル予防のチラシ等をサロン参加していた方に送付しました	寄付でいただいた手作りマスクを同封しました。
機関紙にフレイル予防の記事を掲載	

②アウトリーチ（訪問活動）

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
高齢者困りごと支援事業で電球交換等をおこなった	お互いにマスク着用。時間短縮。距離を保ち実施にあたった。
通所型サービスが中止となり、地域の方に脳トレや体操のプリントやマスクを配布した	在宅で認知症予防、筋力低下が防げるようにしている。
従来から行っている、昼食の配食事業については継続して行っております	配達員一人一人に手指消毒薬等感染予防品の配布。緊急事態宣言下では、食器の一部について使い捨てを使用。
地域配食サービス（有料）	消毒の励行。フェイスシールド等の着用。

③相談・家族支援

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
認知症家族会発足に向けての集まりを開催した	人を集める際には、少人数で消毒や換気を十分にしたり、参加者の検温や体調チェックを実施している。

④カフェ・居場所・地域交流

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
地域住民とのマスク作り	マスクや行事の装飾品の材料は施設で準備し、お渡しや受け取りをする。
サロン活動は密を避ける工夫をしながら再開する場所もあった	名簿管理、感染対策の実施、地域の声を主催者に届けて開催を促す等。

会食サービス	参加人数を減らし、対面はアクリル板使用、隣との間隔を開けてテーブルと座席配置
	通常は、室内でランチを食べながら催し物を行っていたが、今回は催し物は中止し、ドライブスルーテイクアウト方式に変更した。
認知症サロン、認知症カフェ	テーブルに飛沫防止フェンスを設置。入場者人数を少人数に制限し、事前に申し込み制とした。飲食の提供を止めた。参加者にはマスク着用、検温及び手指消毒の徹底。利用時間も1時間に制限。
	会食は座席のソーシャルディスタンスの確保・定員の減、食事時のアクリル板の設置、注意事項の説明。
	検温・消毒・席の配置・飲食方法
	密になる活動は中止とし（飲食、おないものを共有するような手芸活動等）体操を中心として活動に切り替えた。
子ども食堂	手洗い・うがい・マスク着用・検温の徹底。
	施設への入館は行わず、お弁当形式にてお弁当を取りに来てもらう形で開催致しました。
	こどもランチ開催の様子を YouTube にアップしています。
	コロナで休止していた子ども食堂を配食の形で再開した。配食は営業許可のある厨房でなければならず、施設の厨房で作りクーラーバックに入れて車両で移動（5分）して配る。市、市社協に確認の上、保健所の指導を得て、営業許可のある厨房（当ホームの厨房）で作り、定例の集会所に運び、定例曜日（月2回）の夕方1時間余りの中で渡す、という形。
介護の日イベント（オンライン開催）	これまで当苑が実施に至っていなかった SNS 利用の契機と捉え、若い世代も含め介護情報や地域のコロナ禍での取り組み等を発信。併せて紙媒体でのイベント情報発信と共に、スマホ・SNS 教室を開催しシニア層でも新たに情報をキャッチしやすいように支援した。また zoom を活用し、オンラインボランティア講座を開催。コロナ禍でボランティア活動が中断している方へ新しい形での活動内容を提案した。オリジナルイベントソングの作曲、バルーンリリース等による、介護従事者や地域住民へのエールを送る企画も盛り込んだ。 ※これまでキッチン等に参加していた小学校への案内等も行った。中断しているコミュニティカフェの開店を予定したが、感染拡大により中止とした。

⑤学びの機会

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
地域の介護者に向けての講座（認知症について）	・施設外での実施。 ・会場と人数の調整（ソーシャルディスタンスを取れる環境の確保）。 ・マスク着用、手洗い、消毒、換気の徹底。 ・アクリルパーテーションの使用。 ・参加者への協力依頼（講座後に体調不良があった場合に連絡をいただくなど）。
認知症サポーター養成講座の実施	密を防止するため席間隔をあける等の会場設定を工夫。
介護職員初任者研修の開催	研修に際しての感染予防対策実施。

⑥情報発信

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
コロナ禍におけるフレイル予防の資料を作成及び送付	昨年度まで開催していた「ひびき ほっとサロン」（講座・食事会）の過去の参加者へ、コロナ禍でのフレイル予防の啓発資料等を送付した。 また、現時点で利用できる、近隣に開設したシニアステーション（一般介護予防事業の施設）の案内を行った。
介護予防の観点から当包括発行の広報紙にて自宅でできる運動などの周知を実施しました	分かり易くするためイラスト等を取り入れました。
認サポ・介護予防のチラシ配布	3密を避ける形を意識して対応。
脳トレドリルを市民へ無料で配布した	住民に配布し、見守りも兼ね、ポスティングや訪問での配布をしてもらった。
地域に向けて、コロナ詐欺について情報提供し、注意喚起を行った	

⑦防災

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
保存食保管協力、災害時協力	
防災と炊き出し訓練	会場までは外階段を使用し、利用者との接触を避けました。ソーシャルディスタンスの確保と事前の健康チェック・マスク着用をお願いしました。

⑧その他

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
施設内の行事の時に近隣小学校や地域住民に装飾品作りを依頼	

高齢者無料送迎（週 2 回）	マスク着用の徹底。
地域の展示会への作品参加	
フードバンク（週 2 回）	
サロン主催者からの相談に応じた	運動系のサロンの休会、再開についての情報共有を行い、利用者からの相談に対応した。
地域活動をしているグループへのヒアリング、サロン参加者へ近況確認のため往復はがきでのやり取り つながろうプロジェクトとし、手作りマスクの寄贈＋希望者へ配布を行った	自粛がさげばれているコロナ禍でもどんな形であれ『つながり』を意識してもらえるような取り組みを検討。
従来から実施している協議体の実施	・Zoom を用いて、オンラインでの話合いの場の提供。 ・広い会場を確保し、椅子、机の消毒と窓を常時開け換気し来場者には検温と手指消毒を行い、ソーシャルディスタンスを保ち、集合形式での話合いの場の提供。
地域公共機関へ対し駐車場の貸与	
小学生、中学生の登校時の見守りパトロール。養護老人ホーム利用者を行っている	学校再開にあわせて行った。再開にあたり、小学生とのハイタッチなどしないように配慮した。また、配慮して再開すること学校にも連絡している。
市社協が開催したパネル展へ、パネル展示で参加したのみ	毎年設置や撤収、パネル展の係員でも参加していたが、コロナ禍を考慮し辞退せざるを得なかった。
地域住民へのアンケート	令和元年度地域包括支援センター開催の圏域地域ケア会議参加者へ、コロナによる生活の変化・困りごと・地域の状況変化等の聞き取りを実施。

<今年度からの取り組み>

①介護予防・高齢者支援

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
介護予防体操の支援	体操は屋内で行っていたものを屋外で行っている。
歩行力測定会の実施	コロナ禍において地域の高齢者の体力低下を防止するため、9 月より毎月 1 回実施。AYUMI EYE を使用して歩行力の見える化を図り、自宅での運動継続のモチベーションアップを図った。

②アウトリーチ（訪問活動）

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
布マスクを持参し、地域の高齢者の方への体調確認を実施しました	インターホン越しでの体調確認を基本としました。

③相談・家族支援

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
※該当の回答なし	

④カフェ・居場所

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
図書館の掲示板を折り紙で飾る人の集まり支援	屋内で行う活動に関しては、換気出来る、十分な広さを確保するなどしている。
地域の市民団体様による毎月の子ども食堂はコロナで中止となったが、変わって、フードパントリーを10月より開始しました	感染対策はもちろんのこと、食材の受け渡しは施設の外で行うようにしました。

⑤学びの機会

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
地域の高齢者の有志の会（約15名）に介護予防、介護の相談の講話を行った。そこから出張型街かどケアカフェへの参加者が増えた	すでに居場所として存在する有志の会から地域への繋がりに向けて継続的にかかわって行き顔の見える繋がりをつくる。
大学に出向きオンラインで施設実習の代替えの授業を学生に実施した	大学から実習の中止の連絡があり、施設としてできることがないか検討。先生との打ち合わせのうえで、授業内容と資料の作成を実施した。
	事前に学校から卒業生である施設スタッフに依頼があり、介護福祉士の実習が中止になってしまった学生向けに、オンライン（Zoom）での講義を開催した。事前に講義内容等の打ち合わせをした。当日はZoomを使用し、可能な限りの職員を参加させ、学生の要望に応えた。
地域住民向けの勉強会	感染対策の徹底。

⑥情報発信

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
地域社会に「呼びかける活動」を行うことにしました。夏期については感染予防（マスク着用等）の中で、「熱中症に注意！」のプレートを施設の車両や訪問用の自転車に貼って地域の方に呼び掛けました	集客しなくても実施ができる取り組みや催しについて、施設全体で3回程協議して実施。デイサービスの送迎車両にはマグネットプレート、訪問用自転車にはラミネートを使用してキャッチフレーズをアピールしました。キャッチフレーズは施設全体で募集した中から投票にて最終候補を選び、職員全体で参加意識を共有できる活動となるように工夫をしました。また、法人のHP内のブログにも掲載して活動を紹介しました。

地域の高齢者に向けて情報誌「サンライズ・ケアーズ」を配布	コロナ流行前まで行っていた地域向け介護予防事業が中止となったため、過去その事業に参加したことのある方へ向け、暮らしに役立つ情報や自宅でできる体操を紹介した。読み手が繋がりを感じられるような、心が温かくなるような内容を心がけました。
買い物マップの配布	配達があるところや移動販売があるところの情報などのったもの。

⑦防災

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
「防災ウォーキング」町会の協力を得て、徒歩により、数箇所の地域の防災倉庫、避難所、防災ミニ井戸の場所の確認と説明を受けた	参加者への検温、マスク着用を行った。 屋外ではあったが、間隔を空けて歩くようにした。

⑧その他

取り組み内容	取り組みにあたっての工夫
市のエール飯企画に賛同し、6月の毎週木曜日に職員の昼の弁当を延べ6か所の飲食店で注文	3密が大きな壁となり昨年度のような高齢者向けの活動ができない中で、少しでも地域の課題に力になれる取り組みがないかを模索。緊急事態宣言下、接触や飛沫が伴わない活動として企画した。市内商工会との活動目的の共有や、職員の源泉対象にならない範囲での価格設定(店選び)にも配慮した。職員には感想などをSNSへ発信(投稿)の協力を仰いだ。
施設近隣のクリーン活動	人が集まることを避けつつも法人として、地域への感謝の思いが伝わるように、活動を行う間も地域の方との挨拶やコミュニケーションも図りながら行った。 感染予防対策全般、終了後のうがい手洗い、間隔をあけて作業、ボランティアの参加はなし。説明する際は、密を避け、窓がある部屋を使用し15分以内で行う。
「ちょこっとボランティア」ごみ出し等のちょっとした手伝いを包括に登録しているボランティアさんに行ってもらう。	非接触のため、コロナ禍でも継続されている。私たちの包括には70名のボランティアさんの登録があり、年間延べ1200件の実績があるが、マッチングについては、時間をかけて慎重に行っている。お互いの取り決めごともしっかりと行う。
タブレット面会・タブレットによる施設内説明、案内	

(4) 取り組みの内容（今後実施予定の取り組み）

<昨年度から継続しての取り組み>

①介護予防・高齢者支援

取り組み内容
現在行っている体操教室を継続していきます。頻度は町内 5 か所 月 1 回。
従来実施している地域の方々に参加していただいているサロン活動（軽体操や食事会）を縮小し、軽体操のみとしたサロン活動を予定している。
介護予防体操。

②アウトリーチ（訪問活動）

取り組み内容
中止になっている出前講座を時期を決めて実施したい（介護予防について）。
85 歳以上の地域の高齢者への全戸訪問（実態把握）。

③相談・家族支援

取り組み内容
家族介護者教室、地域はつらつセミナー。
出張相談。

④カフェ・居場所

取り組み内容
極力、少人数制にして時間も以前の半分の時間の 1 時間で実施し、飲食の提供も中止。テーブルに飛沫防止フェンス設置。参加者にマスク着用、検温、手指消毒の徹底。
今年度いっぱい配食の方法で子どもらを支援する。
来年度の会食再開については今年度末にアンケートをとって方法の検討をする。
サロンの再開や認知症カフェの再開、講演会はネットワーク形成等を目的とした連絡会など。
サロンやカフェを再開するが、コロナ対策を徹底し、規模を縮小して行う予定。
従来から行っていた認知症カフェについて、現在休止中ですが、再開に向けて検討を始めたところです。
十分なコロナ対策を行った上での認知症カフェ。
サロン活動の再開・オンラインによるクラブ活動の再開。
近隣小学校とリモートを用いた交流会を予定。
施設内のパブリックキッチンを利用し、カフェを開催。
地域住民が気楽に立ち寄り、日頃のお困り事や、心配事を話することができる場所を提供する。
オレンジカフェ。
子ども食堂。
クリスマスにあわせ、近隣の中学校とプレゼント交換を行う予定。ケアハウスでの手工芸活動で小物を作っている。受け渡し方法は相談中。
地域高齢者と大学生ボランティアが、オンラインで繋がる取組みを予定。

⑤学びの機会

取り組み内容
地域の民間企業等へ見守りや支え合いについての講座開催。
地域向けの講演会を年明け以降で検討。
介護職員初任者研修の開催。
併設の地域包括支援センターと共同での、近隣小学校での福祉の授業を実施予定。
高齢者体験に代わるものを提供予定。高齢化社会、高齢者についてプリント資料を作成し、回答をクイズ形式とする。回答者に記念品検討中(学校と相談中)。
一般向けの認知症サポーター養成講座と認知症家族会をそれぞれ月 1 回継続実施予定。小学校での認知症サポーター養成講座を予定。

⑥情報発信

取り組み内容
地域の高齢者向けに行っていた月 3 回ほどの昼食提供ができないため、包括支援センターと協力し、今までの参加者に情報誌を作成し送付する予定。

⑦防災

取り組み内容
※該当の回答なし

⑧その他

取り組み内容
リモートでの交流が出来るように、スマホ講座を実施。
コロナ禍での相談機関の現状を伝達しつつネットワークづくりの為に地域の民生委員さんとのグループ討議。
フードバンク（週 2 回）。
高齢者無料送迎（週 2 回）。
認知症カフェ 認知症ケアを行っている方への支援。
施設見学会。
区内における福祉事業所のネットワーク作りに向けた会合をオンラインで計画。
市社協主催の市内社会福祉法人（高齢、児童、障害）の公益分科会で、例年年 2 回フードドライブを行っている。今年度はコロナ禍で 1 月 1 回の実施となる。

<今年度からの取り組み>

①介護予防・高齢者支援

取り組み内容
地域の高齢者を集め、体操教室を開催。
健康増進事業。
地域住民が集まる場で少人数対象にした介護予防体操の実施。

②アウトリーチ（訪問活動）

取り組み内容
※該当の回答なし

③相談・家族支援

取り組み内容
窓口から一番離れた地域の薬局のスペースを借り、介護相談、介護予防相談を出張し行う。そこから顔の見える繋がりを作る。

④カフェ・居場所・地域交流

取り組み内容
市内の高校和太鼓部による園庭での演奏企画。コロナ禍の影響は学生にも及び、部活の活動機会がなく生徒のモチベーションが維持できない状況があると情報を得た。そこで、施設の園庭で利用者に向けた演奏の機会を提案。利用者は館内食堂ホールやベランダから観賞することにより、一定の距離を保つよう設営に配慮する。
今後は近隣にある音楽大生向けに、音楽療法士の実習を Zoom にて行う予定。

⑤学びの機会

取り組み内容
実習先が受け入れを拒否している学生の受け入れは行っている（管理栄養士や特別支援学校の職業訓練など）。受け入れにあたり、実習を行う 2 週間前からの体温チェックと体調不良時の学校としての対応方法など事前に確認をしている。
中学校の福祉授業を、これまで車いす体験等で実施していたが、職員を同行するリスクを避けるため、体育館での講義のみ実施することとなった。
オンライン利用による認知症サポーター養成講座。

⑥情報発信

取り組み内容
ユーチューブを利用したの情報発信。
冬期に夏期と同様の取り組みで「感染症予防」を地域に呼びかけて行くことに決まっている。
定期的な（約 2 ヶ月毎）「サンライズ・ケアーズ」の配布。

⑦防災

取り組み内容
※該当の回答なし

⑧その他

取り組み内容
周辺施設との交流。
自治会、民生委員児童委員に向けたアンケート調査。

ボランティアによる非接触活動の再開。
ボランティアセンターからの呼びかけに応じ、クリスマスに向けた折り紙作りをし、寄贈する。
包括とボランティアさんどうしの交流会にも力を入れているが、コロナ禍でできなかった。そのため、登録者全員にアンケートを送り、今後 SNS 等での繋がりや趣味活動を通しての繋がりができないか、今組立を検討中。

(5) コロナ禍で影響があったこと（参加者の減少や困りごと・ニーズの変化等）

①取り組みの実施にあたっての影響

- ・いつもに比べると参加者は少なかった。
- ・年間予定のほとんどが中止となりました。
- ・令和2年3月初めより地域の方のボランティア受入れを休止しています。例年7月に開催している地域共催の納涼祭も中止しました。また、施設内の喫茶にて地域のボランティアの方に運営いただいているランチ提供も同時期より休止した状態が続いています。
- ・現在のところ、人が集まるような取り組みは行えていないが、このような状況に柔軟に対応する事で、より多くの方の顔を見ることができると思いました。
- ・例年お祭りを行っていますが今年は開催していません。
- ・今年度に関しては、新型コロナウイルスの影響もあり対面形式による地域交流の開催は難しかった。
- ・参加者を集めての活動にはまだ不安があり、開始できないでいる。
- ・密になるので、多数での打ち合わせは未実施。
- ・毎月実施する予定であったが、6月のみ実施できた。以降は、他職員からの苦言により、休止状態となっている。
- ・実施が何度か延期になった。また座学だけでなくグループワーク等参加者主体の内容を行うのが難しくなった。
- ・高齢者を支えたり、高齢者に寄り添った活動（参集型の活動）が難しい中で、今回は地域の企業応援を目的にした取り組みとなった。1法人での取り組みでは、注文数や継続期間などに費用面も含め限界がある反面、職員の負担は最小限で行えた。
- ・三密をさけるために、参加者を少なくした。
- ・感染拡大に伴い、施設への来園・面会制限をせざるを得ず、5月以降は活動を休止している。
- ・コロナへの不安でニーズはあると予想されるが、宣伝が足りていないので、利用増にはつながらない。
- ・感染拡大防止のため全て中止。
- ・介護予防体操の参加者はやや減っている。
- ・他の団体との共同活動も検討しましたが、情報を集める中でどの団体も活動（清掃活動等も）自粛しており、職員からのアイデアもなかなか生きてこなかったのが現実でした。
- ・本来は地域向けに秋祭りを行っていたが、開催内容をクリーン活動に変更して法人職員で実施した。
- ・開催することが難しい、サロンや体操教室がありました（スペースの問題等）。
- ・介護予防教室を実施予定であったシニアクラブやサロン等の活動が中止となってしまった。
- ・参加人数を制限して行うこととしたため、日程を2回に分けて行わざるを得なかった。
- ・今までは、地域の子供達と入居者さんが一緒に遊んだり、食事を共にすることで交流はありました。

が、コロナ禍では行えなかった。

- 施設内のサロン活動が開始できていない。集まると聞こえづらいこともあるが距離が保てず会話する場面が見受けられる。その都度注意も出来ず大丈夫かなと静観してしまうことがある。

②地域高齢者への影響

- 地域の中に、出かける場所が無く高齢者が閉じこもりになる
- 集い合う場（機会、場所）がなく、高齢者にとって非常によくない状況だと認識している
- 地域活動に参加されていた方などが、特にコロナフレイルやコロナうつになっている状況が散見される。
- 外出の機会は減っている様子だった。そこで日の出町のピクニックマップをオリジナルで手作りして、ランチと一緒に配った。ランチを受け取りそのままマップを見てスポットに直行していたファミリーが何組もいた。
- 配食サービスも行っているが、昨年同時期（上期）と比較すると、今年は100食以上多く配食した。外出自粛が響いてると思われる。
- 感覚的なものですが、担い手など精神的に落ち込んでいる方、筋力低下をきたしている方が増えていると思います。
- 自粛期間中に外出できず筋力が低下したり、気分が落ち込む方が増えた。
- 対面での体調確認が出来なかったため、変化に気づきにこなってしまったことです。
- 参加者は自宅での閉じこもり生活が長かったことで、筋力低下が見られた。参加者は大変喜ばれた。
- いきいきサロンの中止による地域の方への影響。会食サービス中止中の地域の方への影響
- 当施設のイベント以外にも、地域の様々なイベントが軒並み中止、人が集まれる場所・機会も制限され、外出の機会が極端に減った、目に触れるテレビのニュースもコロナ関連ばかりでネガティブなものばかりなので、地域のお年寄りの中には気分が落ち込み、行動の変化や認知症の発症・進行が見られている方も多いようです。
- 感染症の不安の他、やはり筋力低下や認知症になってしまうのではという不安がアンケートにより聞かれた。また、ボランティアの活動の場がなくなってしまった。
- 配達員はボランティアなのですが、引き続き活動して頂けています。配達先の利用者の方が、濃厚接触者に該当していたにも関わらず、当該情報が知らされず、しばらく通常の配達を継続してしまっていた事例があり、当該事態における対応方法や情報の共有方法に課題を感じています。
- 自宅に引きこもってしまう方等にとっては、栄養補給、他者とのかわりと言う部分においても貴重な機会である、と感じています。
- 自宅にこもってしまう方もいて、介護予防や地域の情報を必要とする方が多くいる。
- 感染症の不安の他、やはり筋力低下や認知症になってしまうのではという不安がアンケートにより聞かれた。
- 自宅に引きこもってしまう方等にとっては、栄養補給、他者とのかわりと言う部分においても貴重な機会である、と感じています。
- 非接触のボランティアはずっと継続できて、ボランティアさんの介護予防と助けてもらっている方の孤立化防止となっている。電子媒体での繋がりを立ち上げたい。

- ・地域での活動（町会の活動なども含む）が減ったことで今まで予定していたスケジュールがなくなり生活に張りがなくなってぼやぼやしてしまうという方や動きが悪くなったとおっしゃる方が大変多いと感じている。今後感染状況の悪化による緊急事態宣言などに伴う活動の停止が起きるのではと危惧している。

③地域住民からの声

- ・会場、区民館の感染予防マニュアルに則り、感染予防に努めた。集いや居場所が中止となる中、有志の会の要望があったため実現できた。
- ・コロナ禍でも学びたいという意欲のある受講生が多く感じた。
- ・早く交流サロンを再開してほしいと以前からの利用者に言われている
- ・出かけるところがないと言われている。

④地域とのつながりに関する影響

- ・新しい、学校との連携の在り方を考えるきっかけとなった。
- ・ボランティアの手伝いを断り、受け入れ側も極力人数を少なくすることで対応。これにより、地域の協力が希薄になってしまう心配がでてきた。

⑤気づかされたこと

- ・会食ではキャバが 30 だったため、人数を増やさないようにしてきていたが、配食に関しては 60 まで受け付けたところ、ロコミで一機に増えて MAX になり、新規申し込みは待機となっている。居場所づくりや食育など、目標を踏まえて進めてきていたが、今回、集会方式から配食方式に変えた際、引っ込み思案な子どもや人間関係の煩わしいのを避けていた子どもが意外にも多かったことがわかり、今後の会食を考える際の参考になった。
- ・これまで行ってきた地域への取組みについては、あらためて集客するスタイルが多かったことに気付かされました。

⑥その他

- ・どこの団体も活動を中止していたり、なかなか再開させられなかったり、参加者や代表者の ADL の低下により会自体が消滅したりも多々あった。
- ・居場所に参加することへの感染症リスクに不安を感じている。
- ・万が一、居場所でクラスターが発生した際の責任の所在。
- ・フェイスシールドを担い手全員が欲しいがどこも売っていないので困っている。
- ・サロンに対して、感染予防策を取ったうえでの継続をとの区からの要請に対し、リーダーが対応しきれないと悩み、辞める決断をしてから連絡が入った。翻意されず、結果終了となった。ほかのサロンも担い手が高齢化し、リーダーになりたくないという理由で終了。
- ・つながりをもちたい希望は強く感じるがコロナに対する恐怖心が強く実現できない。
これまで以上に小規模の集まりであれば抵抗感は少ない印象である。
- ・これまで活動自体休止しており、久々の再開であったが、問い合わせ数が確実に減った。

- ・子どもがマスクの着用や3密回避の意味をわが身のこととして理解をしていない。「言われるので嫌々やっている」程度なので、マスクをつけない、大声でじゃれあう等の行為が常に見られ、ボランティアがそれへの対応に疲弊している。
- ・当施設のイベント以外にも、地域の様々なイベントが軒並み中止、人が集まれる場所・機会も制限され、外出の機会が極端に減った、目に触れるテレビのニュースもコロナ関連ばかりでネガティブなものばかりなので、地域のお年寄りの中には気分が落ち込み、行動の変化や認知症の発症・進行が見られている方も多いようです。
- ・ボランティアの活動の場がなくなってしまった。
- ・配達員はボランティアなのですが、引き続き活動して頂けています。配達先の利用者の方が、濃厚接触者に該当していたにも関わらず、当該情報が知らされず、しばらく通常の配達を継続してしまっていた事例があり、当該事態における対応方法や情報の共有方法に課題を感じています。
- ・3回目となった11月より参加者が運営側のボランティアとして活躍するようになった。

4. コロナ禍における地域に向けた取り組みのヒント

(1) コロナ禍における地域に向けた取り組み実施のアイディア

※実際に実現可能な取り組みだけでなく、「こんなことが出来たらいいな」、「こんなことをやってみよう」といったアイディアをまとめています。

①感染予防をしたうえで活動の再開

- ・来年度の納涼祭について、非接触という形を模索しています。リモートでのライブ参加などどのような形が望ましいのか検討中です。
- ・直接会い、リアルな交流を感じ楽しめる活動。
利用前の健康管理を依頼、検温、手洗い・手指消毒。
人数を減らし、利用者同士が密とならないよう間隔をあける。
映像や写真を使用する。
- ・町内会の会館等、比較的広い施設を使用し、密にならないよう完全予約制でのイベント・行事。
- ・感染予防を徹底しやはり高齢者が集える場所が作れればと思う。
- ・密にならないよう他場所にもサロン場所を設け、分散型で実施を検討。
- ・高齢者施設ということもあり、新型コロナウイルス感染対策が厳しく、なかなか地域の方との接点を持つことが難しい。
- ・地域の会館等を利用しながら、出張カフェを開催し、引きこもりがちになっている方々が、気楽に立ち寄れる場の提供をする。運動不足が懸念されていることより、簡単な介護予防体操と相談窓口も取り入れながら行う。
- ・地域向けのランチ提供を再開したい。
- ・地域交流会（生き生き交流会）を開催し、地域での出来事などを発信してもらえよう場の提供（毎年、月に一度開催していたがコロナ禍で開催を中止している）。
- ・例題にある様に3密を防ぐためにもオンラインでの講座もありかと思います。
また、自施設は目の前に公園があるなど恵まれた環境下であるのでソーシャルディスタンスを取った『青空 体操教室』なんてのもありかな？なんて思います。

- ・ソーシャルディスタンスを保ちながら屋外での集団体操を行いフレイルを予防する。
今年 2 月まで継続していた特養での地域公益活動である近隣の方々を対象とした笑いヨガを毎月行っていました。コロナが落ち着いたら再開したいと思います。現状では近隣の行事は全て中止となっており残念に感じています。
- ・少人数（2～3 人）で集まって短時間での体操（屋外で）。
- ・人数も制限し、ソーシャルディスタンスをきちんととれ、感染症対策をきちんととれる場所で、認知症カフェや独居で人との交流が減ってしまった方たちとの集い。

②デジタルツールの活用

- ・現在、施設でのレクリエーション（フィットネスインストラクターによる体操、音楽療法士による音楽療法、）を入居者のユニットに Zoom で配信し、密を避けるようにしているが、今後は、近隣の高齢者にも配信を届けたい。
- ・モバイル講座。
- ・リモートを用いた地域向けの介護教室等の開催。
- ・フレイル予防の体操、講座等の動画配信(ホームページ掲載含む)と、それを高齢者に閲覧してもらえようスマホ講座を行うことを検討中。
- ・Web でのボランティアによるレクリエーションの実施。
小学校などとの Web による交流会の実施。
- ・高齢者向けのモバイル講座は今後必要だと思います
- ・ズームなどを使った会議・意見交換をすることで、これまで参加していなかった機関とのつながり啓発。
- ・小中学校の子どもたちに、福祉・介護のオンライン授業
- ・Zoom 等を利用したオンラインボランティア。
- ・オンラインでの介護相談や福祉講座などの開催
ライン等を使用した施設見学会や HP でのデータでの見学会など
- ・ZOOM を活用した『つながれる場』。
- ・現在行っているサロン活動を ZOOM などを活用したオンラインで実施するなどを検討したいと思っています。
- ・高齢者にも簡単に操作できるタブレットを配布して、web での定期的な安否確認や交流が図れる。
- ・オンラインお茶会（他地域の方との交流会）。
- ・家族向け入所相談会(モバイル)。
小学校・保育園等の交流会をモバイルで実施(施設ではたくさんの方に見てもらえるようプロジェクターを使用)。
- ・「コミュニティプラットフォームあだち」という団体の立ち上げに加わったので、オンラインを使用した活動に積極的に参加していきたい。
- ・当施設をご利用いただいている利用者様の身元引受人様にも高齢の方が多数おられ LINE や Zoom による面会ができない状況にあり、ご不自由をお掛けしています。IT の活用、使用方法について簡単に利用できるようなれればと考えます。

- ・オンラインバザーの開催（ホームページ上にバザーの案内をだしバザー品を画像で展示し購入していただく）。
- ・学生ボランティアによる高齢者向けモバイル講座。
- ・ローカル番組、ラジオの活用。
- ・オンラインでの開催（行使など）を検討中。
- ・地域の大学生とともに、大学生と高齢者がオンラインで繋がる取組みをすすめる中で、大学生の協力を得て、地域でのモバイル講座の実施を検討中。
- ・LINE、ZOOM（オンライン）ごく小グループの趣味活動等の自主活動班をつくり、それぞれと包括センターが繋がる。

③アウトリーチ

- ・認知症カフェができないので、職員が端末を自宅に持っていき、その場でオンラインで他者と交流する企画を耳にしたことがあります（具体的な内容でなくすみません）。但し、当施設でどのように実施できるかは全く検討できていません。
- 地域に行ったアンケートでは、集いの場が求められているような結果になりました。

④情報発信

- ・チラシを作った際は、自治会の掲示板の活用（回覧は控えているところが多いと思うので）。
- ・当苑では、コロナ禍における活動のアイディアは出し尽くした感がありますが、結果として今回の取組みにつながっています。当苑の活動（デイサービスの車両等に社会へ呼びかけるキャッチフレーズを貼り付ける）を沢山の施設で行えると一体感があっていいですね。

⑤今後実施したいこと

- ・コロナが落ち着いたら、昔やっていた餅つき大会をしたり、なかなか個人的には行けない施設見学をしたり、困ったときはどうするか？等、年齢に関係なく地域の方が誰でも参加できるような取組をしたい。
- ・現在はコロナの影響によりオンラインの活用が活発化しているが、やはり高齢者にはなじみが薄い。このような状況だからこそ、高齢者に馴染みのあるアナログ（手紙や電話など）を活用した取組をしたいと考えています（具体的には何もないですが…）。
- ・高齢者向け勉強会。
- ・インターネットが活用できる世代に対してはリモート研修が活用できると思うが、高齢者に対してはそれは難しい。ローカルテレビの活用ができないかと思う。
- ・既存の活動をどのように再開するかではなく、住民のニーズに基づいて何が出来るかを検討するようなワークが出来たらと思います。
- ・住民同士でインターネットを利用した買い物の方法を教え合う講座。
- ・廃業した商店のスペースを借り出張し「よろず相談窓口」の実施。相談に来た方からも力や知恵を頂戴する。誰かの役にたつ生きがいを見つけていただき居場所をつくる。
- ・町会の協力が得られれば、町会の事務所や集会所で、サロンなどを開催できれば、普段サロンに縁

のない町民にも参加しやすくなると思う。コロナの情報や生活の工夫などの知識を伝える場ともしやすいと思う。

- チラシや手紙の活用。
- 町会等お付き合いあるところとグループになり（ライングループなど）今後のニーズや対応などについて情報を提供し合う。
- 高齢者施設の開放型活動は暫くできないので、近所の集会所や子どもセンターで子供を主体とした取り組みに高齢者関係者が支援するのはいいと思う。
- 介護保険サービス体験型アトラクション（ご利用者もサービスを体験することができ）。
- 地域の人と一緒にウォーキング大会等の健康増進の取り組みをしたいと考えています。
- 小学生の登下校時のパトロール。
- 会って話せる場。コロナでソーシャルディスタンス等が必要になっていますが、やはり、会ってみんなでわいわい話をしたい、というご希望を感じます。
- 非接触型のボランティア活動（ハンドクッション作り等）。
ボランティアのためのサロン活動。
- 高齢者向け パソコンやスマートフォンの使用方法。
- ウイズコロナの新たな地域活動の実践事例紹介。
- 認サポ（ZOOM）。
- 互助を作るための養成講座。
→社協を中心に様々な取組はあり、参加したこともあるが改めて取組が地域包括ケアシステム構築が進む中で事例発表会など…の意。
- 地域経済活性化のイベント開催。
- 買い物助け合い（買い物弱者の代わりに品不足で買にくい日用品等を買ってくる仕組みを作る）。
- 防災、減災をテーマにした取り組み。
- 高齢者施設での生活はどのようなものか等の講座。
- 区の区画調整農地を利用し、園芸や野菜収穫活動を行いたい。屋外であるので、密閉な空間を回避できる。
- 地域高齢者に向けたミニマルシェ（移動販売）地元の名菓や特産物の販売、買物に行きたくても行けない高齢者の方は多いためニーズはあると思います。

⑥その他

- 高齢者が参加できる取り組みとは何か、今後コロナと共存する社会において、活動の範囲が元のように戻ると思う。地域の課題と同時に、コロナと共存する中で社会的に理解、納得の得られる活動とは何か？を探ることも必要ではないか？私たちは、地域の課題に対し、地域の理解や協力が得られて初めてアクションにつながる。私たちの考えや都合が優先されてしまわないようにしたい。
- 情報を提供できる方法として IT だけでなく高齢者が受け入れやすいものがあればいいと思う。
- 情報の共有をしたいが LINE などを使用している高齢者が少ない。
- 散歩を兼ねたごみ拾い。
- 法人連絡会で「なんでも相談」をやって行く方向で検討している。

(2) コロナ禍における地域に向けた取り組み実施にあたっての課題

①コミュニティの形成に関する課題

- ・社協を含め近隣施設間の温度差。単独で実施するにはそれほど障壁ではないが、協力して何かを企画実施していくには課題。
- ・自治会などもとともと希薄になっているものが、コロナにより地域のイベントが軒並み中止となり、つながれるきっかけもなくなっている。活動自体が行われておらず、存続も危ぶまれている。そんな中、新たな協議体の設立など難しい。
- ・地域とのつながりや地域の方のニーズがあるにも関わらず応えられない。
- ・地域に根差した施設を目標にしておりますがコロナ禍で地域の方も寄り付かない、施設も閉鎖的な環境縮図が固まりつつあり再開時には一からスタートになるかと考えます。
- ・コロナ前は地域に向けた取り組みをたくさんしてきました。そういった方たちがコミュニティがなくなってしまったことにより、ADLの低下や認知症などを心配しています。今は手立てが見つかりません。

②感染への不安、開催にあたっての理解

- ・直接会って、会話しなければならない事でコロナが心配。
- ・若者との交流に対しての、お年寄りのコロナ禍での不安。
- ・施設職員及び入居者家族等の理解。
- ・公の施設であり、感染リスクに慎重にならざるを得ません。再開が見通せません。
- ・行事を行うにあたり三密リスク・特養施設内での集団クラスター発生可能性がある為、慎重に検討していく必要があります。
- ・ご利用者の安全確保（感染症対策）をした上で、どこまで地域の方と関わり合いを持てるのが課題と考えています。
- ・従来から、地域と施設、地域住民同士がつながる場として、多くの方が集う場所を作ることをしてきましたが、コロナの影響で集うこと自体がリスクになってしまっているため、他の方法で効果が得られる手段を考えなければならないのですが、未だに答えが出せていません。また、施設のハード面を活用したくとも、その活動に参加された方の中にコロナ陽性であった方がいた場合、施設内に感染の可能性を生じさせるリスクを負う活動となってしまうため、どうやってバランスを図るべきか非常に悩み、答えが出せていません。
- ・会場の人数制限、住民のコロナに関する過度な恐怖感。
- ・高齢者施設なので、世間一般の「ウイズコロナ」の動向（例:GOTOキャンペーン）のなかで、感染予防に慎重さが求められると感じます。世間で経済活動再開が広がっていても、それに即応していくことはできず、地域の方たちの活動拠点に（すぐには）なれないところがあります。
- ・施設職員を通じた利用者への新型コロナ感染。
- ・取り組みを起点としたクラスターの発生。
- ・地域住民の理解。
- ・高齢者と乳幼児親子の触れ合いなので、現実的に感染症が終息するまで実施は難しいと思われる。
- ・不特定の方が一堂に会する事の不安があります。当該事業による感染拡大が生じた場合の責任問わ

れることが一番の課題です。できれば、地域との連携事業を行いたい。

- 高齢者施設の為、感染しない・させない取組みを行っているが、不安は尽きない。
また、万が一感染してしまった際の風潮被害が怖い。その為、イベント等の縮小、中止へ考えが至ってしまうのが現状。
- 参加者が集まらない
- 感染リスク。
- 高齢者施設において地域活動推進による入居者及び家族の感染リスクへの不安や不満。
- web リテラシーが高齢者は低く、対面型でないと参加等が難しい。
- 施設内に不特定多数の外部者を入れることへの不安。
- ご利用者家族、従業者への一定の自粛協力を行っている中、地域に向けた取り組みは無自覚症状者等による、施設利用者、職員への感染。施設内及び職員において感染者が発生した場合の影響を考えると疑わしい症状者が発生しただけでも感染を想定した対応を行っている中においてさらなるリスクを伴った地域交流は現時点では避けたい。
- 社会の感染予防の意識は高くなっているが、様々な活動が再開されてから感染者数は少しずつ増加傾向にある。施設は感染症の同時流行も踏まえて、感染拡大防止策を更に強化しているのが現状である。この状況が緩和できる環境にならないと、地域活動を再開することは難しい。
- 感染対策、防止策の徹底。コロナ罹患時の風評被害。
- 高齢者の方のいらっしゃる事業所なので、不特定多数の方との接触を避けたい。
- 施設に来てもらう活動を行いたくても、高齢者が利用する施設として様々な見方や声（近隣の方や利用者家族の気持ちの問題）があると思います。
- 施設内開催によりクラスター感染やご利用者への影響が起きるのではないかと不安になり、外部の受入れを制限しております。
- 地域住民が、外に出る勇気を持つことができるか。
- 会場探し。クラスターを発生させない。案内の方法についてもこれまでは積極的にできたが感染のリスクや責任の所在から消極的になってしまう。
- 高齢者が多いサービスでは外部の方との接触で感染した場合重症化するリスクが高く。家族の何名かからは可能な限りそうしたリスクを避けてほしいとの要望がアンケートで上がっている。
- 人との繋がりを求めている高齢者が、人と人とが直接会うことを避けなければならないこと。
- 社会福祉法人で、特養、訪問介護、デイサービス、保育等の事業所を抱えているため、感染予防対策を徹底する必要がある。
- 限られた場所で行うため密を避けられない。施設に不特定多数の人を招くと感染リスクとなる。
- 利用者が参加する自主活動では、換気・消毒を職員が行い、立ち会うこととなっているが行えておらず、自主活動が中止となっている。
- 施設を主体とした夏には納涼祭、秋には音楽祭を開催していたが、年を追うごとに参加して下さる方が増え密な混雑ぶりとなりワクチンや治療方法が確立されない限りは再開は難しいと考えます。この状況下で新たな取組みを始めている事例がありましたら是非教えていただきたいと思います。

③デジタルツール活用に関する課題

- ・インターネットを活用した LINE や ZOOM をやるのであれば、できる若い人たちの力が必要。
- ・高齢者が気軽に WEB 活用というのもハードルが高いと思う。今出来ることはソーシャルディスタンスを保ちながら、少人数制の企画にて徐々に行えるものから再開していくしかないと思う。
- ・リモート環境の構築。
- ・顔の見える関係づくりを築くことが困難となった。オンラインで繋がる必要が生じたが、オンライン使用について制限がある機関があったり、地域住民(高齢者)がオンラインを使用できないでいる現状がある。
- ・イメージを形にするときの IT スキルの限界。
- ・インターネット環境の整備。
- ・モバイル等を利用した対応は家族、特に一定の年齢以上の方々は使い方が分からないと利用出来ない。

④再開の判断、基準に関する課題

- ・制限解除の線引きもどの程度終息したらと設定することが出来ないのもどかしさを感じます。
- ・コロナ流行前まで行っていたイベントを再開する上での予防対策、再開のタイミングなど、未だに検討課題としてあるので他施設でどのような検討がされているのか参考にしたい。
- ・併設の事業所なので、外部からのボランティアの受け入れが困難であった。今後、柔軟な対応ができるまでの基準がわかりにくい。
- ・新型コロナに対する懸念により行事規模の縮小が余儀なくされている。地域の方々との交流再開時期については未だ不透明であり、何を再開の基準とするのか、そういったものが無いと判断が非常に難しい。
- ・近隣小学校中学校等との関わりを再開したいが、市から各教育機関に対して外部との関わりを制限する通知が出されていると学校側より説明があった。活動再開時期を決める際は市の判断も踏まえて判断する必要がある。

⑤会場の確保、人材、感染予防策に係る業務量増

- ・参加しやすい場所、風通しの良い会場探し。
- ・3密の回避、飛沫防止、消毒等に伴う業務量の増加。
- ・密にならないよう、施設面会等にも使用したい地域交流スペースを地域に向けての開放することを考えているので場所の確保。
- ・With コロナの中で、企画内容の形を変えても、繋がれる企画を行うかどうかの決定と、その際の感染対策をどこまで行っていくかをなかなか判断つかないこと。
- ・ボランティアなど、今まで受け入れていたが、受け入れられない。
3密にならないように地域との交流をしていくことが難しい。
- ・やはり感染予防だと思います。
- ・情報伝達方法の検討。
- ・見守り活動。

- ・機材など設備の問題。
- ・常に感染の大きなリスクにさらされること。
- ・大人数では集まらないので、出来るだけ少人数の取り組みを数回に分け実施しなければならないと考える。
- ・高齢者施設の直接介護職員は暫く、感染症対策の徹底を要するため、地域活動は気を付ける必要がある。
- ・高齢者の感染症は今後も油断できない状況であること。
- ・再開の仕方や方法、お休み前の活動内容を柔軟に変えられない、新たな活動様式の安全性に対する責任。
- ・三密にならない状態への工夫。
- ・感染対策と活動の両立。
- ・密になってしまう事。
- ・ご利用者との接点を避けるための工夫。
- ・人と人との接触。
- ・入所利用者への様々な感染予防策（面会やボランティア等の受け入れ制限）との両立。
- ・感染予防。
- ・地域に向けた取り組みはやはり実際に交流があってこそより意味があると思う。感染対策をしつつ、出来るだけ多くの方々と実面談による交流をどう実現していくかが最大の課題。第二は施設のマンパワーの問題。感染対策という業務負担が増えており、従来にも増して地域活動に向けるマンパワーが限られてしまう（限られるというより、現状では不可能）。
- ・クラスターの予防。
- ・何を行うにしても職員の不足でコロナ予防のみで精一杯である。
- ・感染予防の手立てをとるのに労力がかかり、もともと人員がギリギリのためなかなか手が出せない。
- ・三密を回避できる環境が整備できない。
- ・密にならないように取組むこと、又コロナ禍で参加者も集まらない等あると思われる。
感染症対策を行なう中で、地域に向けた取り組みを企画する余裕がない。
- ・ソーシャルディスタンスをとれる場所の確保、コロナウイルス感染症の東京都内での拡大状況の不安。
- ・開催場所、正しい知識、人数制限、感染症対策などの対応が適切か。
- ・人数を制限して行うため、何回かにグループを分けて行う手間がある。

⑥状況把握に関する課題

- ・地域の人たちの考え等も知りたいが、集会を開けないので住民の意見を聞くことが難しいと自治会長さんから伺った。
- ・人数の制限、密を避けるために集まっての取り組みができない。直接会っての活動ができないため、利用者の方の様子や地域での変化がつかみにくい。

⑦その他

- ・実際に感染者が出た場合、営業休止となっている事業所があり収支の面でも影響が大きい。
- ・飛沫防止の透明な仕切りを設置しても退かして喋ろうとされたりする事がある。
- ・高齢施設では現在家族面会もリモート対応しています。これまでの地域とのつながりを非接触という形にしていくのに、どのような方法があるのか、または適切なのか考えています。事業所により対応方法や考えが異なるっているので、地域の事業所が一丸となって取り組むことが困難。
- ・コミュニケーションツールの使いこなしや効果への評価。
- ・感染症への不安と体力の低下に対する不安の葛藤に悩まれている方が多くいるように感じます。
「with コロナ」と言われていますが、蒔苗だけが先行しているように感じます。介護予防や社会参加の視点での with コロナの取り組み方が分からないので、ご教授いただきたい。
- ・コロナの影響で、閉じこもりがちな高齢者が増えているようで、デイサービスへの新規申し込みが増えている。地域の活動が縮小している中、介護保険サービスの方へ寄っている印象を受ける。感染予防のためにも、高齢者の居場所は分散できるようにした方が良いと感じている。
また、ボランティアについても問い合わせが増えていて、高齢者のみならず、地域において居場所がない、生きがいがない人が増えているように感じている。
- ・テレビでのコロナへの恐怖をあおる報道で、人との交流を怖がる人が多い。テレビの影響が課題。
- ・コロナ感染予防方法の確立及び、治療の確立。
- ・もともと社会活動が維持できていた高齢者は、自己判断や家族等の協力の中で、社会参加の機会が増えていると思う。高齢者が外食や散歩をしている姿を見ることは多い。その反面、介護保険が行き届かない中で誰かのサポートが無ければ社会参加が難しい方を今後どのように支えていく事ができるのか？飛沫や接触による感染リスクの報道、又は、感染に対する知識が乏しいゆえに過剰なソーシャルディスタンスに繋がっていると考えられる。生活上、様々なリスクは生じる中で、コロナに関して都民が納得出来る活動とは何か？軒並みイベントが中止されている中で、地域性や規模など、再開企画への検討が求められるのではないかと感じます。
- ・密にならないように対応するには参加人数を制限しなければならず希望があっても参加を諦めなければならない方が出てくる。
- ・今までは集まる・施設に来てもらう、を目標にしていたが、3 月から真逆を実行しているので今後の取り組みをどうしたら良いのかわからない(少人数にして取り組む予定ではあるが不安は残る)。
- ・地域に向けた取り組みを行い外出の機会を作ることや交流をしていただく事が主な目的と考えていたので、人との接触を減らすことで感染リスクを下げる対応を行っている現在ではこれまでの感覚での開催は難しいと感じている。地域交流の根本の考え方を見直すことが課題となると感じている。
- ・不特定多数との接触を避けねばならない状況がいつまで続くのかわからず見通しがたかない。
- ・コロナ禍を有限期間の事象であると考えたとすると、リスクが非常に高い特別養護老人ホームではその期間の不活動は仕方がないことかもしれないと感じます。
- ・検温、消毒、マスク着用、蜜を避ける等々感染対策の基本をしっかりと行いながら実施して行きたい。オンラインでもできるが、実際にお会いすることができるように考えている。
- ・まずは今まで行ってきたことをコロナ対策バージョンにして継続し開催の機会の確保が大切であると考えます。その中で新たな実施方法やニーズの抽出ができれば良いのではと思っています。